

古利根沼の自然観察会を通した環境教育

1999年度の年間計画

古利根の自然を守る会
古高 利男

1. はじめに

バブル景気の頃、古利根沼を埋め立てて住宅開発することが表面化した。沼の危機を察知した市民有志や市議会議員らで、1988年9月23日「古利根の沼を守る会」を発足させた。

以来、開発に歯止めをかけるべく、<月1回、雨天決行>をモットーに、①四季を通して観察し②自然の仕組みを知り、③保全策を考えよう、という意図のもとに活動を続けてきた。

特に、四季を通した観察会をし、会員や市民の古利根沼に対する理解を深めてもらい、開かれた沼にしていくことであった。そのために、環境教育的な視点として、①自然を見る知識や情報を豊にし、自然と人間とのつながりにきずいていく。②自然の保全・維持・向上活動への自主的な参加のきっかけをつくったり、家庭でできる実践への意識づけを図る。③自然が豊になることは、人間の心も生活も豊になるのだという感性を育てる。

このような環境教育的な意義の拡大と定着が、ゴミは無く、水の汚れは減少し、沼の生き物が増え、回りの植生が安定し、子どもから大人までが楽しく安心して散策する開かれた沼に変えていく力となるとイメージした。そして、この力こそが開発行為への最も強い味方になると信じた。

2. 活動内容

毎月1回、第4日曜日の観察会では、野鳥観察植物観察・沼の生き物調べを中心に実施してきた。他にも沼周辺のゴミ拾い・エコアップ・他団体への視察などを行ってきた。

その中で、次のような意図的・主体的な変化が現れてきた。

まず、専門家が育ってきたことである。テーマごとに、知っていることは言い、わからないことは聞く・調べることをくりかえしてきた。その中で、より自然観にそった理解が深まってきた。ま

月 日	テーマ	内 容
4月25日	水田の野鳥	シギ・チドリの観察
5月23日	河川敷の動植物	足元の植物は
6月27日	チョウを探そう	ミドリシジミは
7月25日	水路の生き物	我湖排水路には
8月22日	沼の生き物	どんなトンボがいる？
9月26日	手賀沼の浄化	浄化の様子見学
10月24日	キノコを探そう	森にはどんなキノコが
11月28日	斜面林の野鳥	じっくり観察
12月23日	田圃の野鳥は	タゲリは来ているか
1月23日	田圃の野鳥は	イソシギ・タシギは？
2月27日	冬芽の観察	100回記念観察会
3月26日	沼を一周	桜を見ながら

た、お互いに自分の好きなものを追及してきた。それらの事が少しずつ専門家を生み出しているようであった。

例えば、クモに詳しい人から話を聞くうちにだんだんとクモにも興味・関心が広まってきた。また、キノコを調べているうちに、判別がひじょうに難しいということがよく分ってきた。

次に、観察会での情報・資料は即座に職場で活用されてきた。古利根ではなんでもないような真っ赤なカラスウリさえ、学校の子どもたちにとっては十分に不思議さを誘うものであった。

三番目に、奨励金で購入した双眼実体顕微鏡は大変効果的であった。20倍の世界は、魅惑の世界でもあった。なんでもないような水溜まりの水。20倍の世界では、様々な生き物が忙しく動きまわっているのだった。水の中の不思議さには驚きとともに生命誕生の確信が伝わってきた。

天気の悪い日・体調の悪い日といろいろであったが、観察会はとても楽しく、充実していた。

3. 今後の課題と展望

参加者が固定してきたこと、高齢化してきたこと、活動の場が限定されていること等の課題はあるが、持続することによりそれらを解決しつつ、古利根の沼から環境保全を発信し続けていきたい。